

様式③

提出日 2020年 1月 22日

2020年度 琉球弧研究支援 報告書

研究テーマ「 子ども食堂について 」

氏名：新垣結月 上原優花 新里紀琳 長浜桃香 仲本ひびき

所属学部学科：人文学部こども文化学科

I. 初めに

私たちは、貧困対策としての子ども食堂について研究した。

II. 研究の目的、動機

私たちは、沖縄の子どもの貧困率が高いことを知った。その沖縄でどういった対策がされているか調べた結果、子ども食堂があることを知り、興味を持ちさらに調べようと考えたため。

III. 研究方法、地域、期間

NPO ももやま子ども食堂とていーだ子ども食堂にボランティアとして訪問した。

ももやま子ども食堂 沖縄県沖縄市上地 3-20-12

ていーだ子ども食堂 沖縄県浦添市仲間 2-47-5

調べ学習期間 9月～1月

訪問日 9月 18日 11月 28日 12月 26日

IV. 結果

設立年 (ももやま子ども食堂) 2015年5月 (ていーだ子ども食堂) 2015年5月

設立理由 (ももやま子ども食堂) 地域での孤食が多くみられ、孤食を防ぐ。また、地域の子ども達を地域で見守り育てるために任意団体として設立。

(ていーだ子ども食堂) 子ども達への居場所づくり。虐待やネグレクトから子どもを守る。孤食を防ぐ。

活動理念 (ももやま子ども食堂) ①子どもの最善の利益を考えること
②遊びの場、休息の場であること

	③学びの場であること
	④子ども一人一人を大切にできる場であること
	⑤子ども同士共に助け合っていける場であること
	(ていーだ子ども食堂) 地域健全育成のための場所としても機能するよう「地域の子どもは地域で守り育てる」ことを目標としている。
活動日	(ももやま子ども食堂) 月から金まで。水曜日定休日。曜日ごとに学年をわけ る。 (ていーだ子ども食堂) 第2・4土曜日
活動の中心	(ももやま子ども食堂) 放課後の子ども達への遊び場・食事の提供をして、居 場所を確保している。入浴。家への送迎。 (ていーだ子ども食堂) 食事提供。季節行事、地域交流会、児童センターフ ェスティバルなどの多くの行事を取り入れている。
年齢層	(ももやま子ども食堂) 小1から高1。利用する子供で長い子は、5年間。 (ていーだ子ども食堂) 幼児から大学生まで。児童センターを利用する子はだ れでも利用可能。
資金源	(ももやま子ども食堂) 沖縄市の補助金、地域からの補助 (ていーだ子ども食堂) 国、行政。
対象地域	(ももやま子ども食堂) 沖縄市 (ていーだ子ども食堂) 浦添市
立地・建物	(ももやま子ども食堂) 沖縄市にある一軒家。住宅街の中にある。近くに小学 校があり、アットホーム。 (ていーだ子ども食堂) 浦添市の児童センターの中にある。児童センターの中 に体育館がある。近くに小学校がある。
遊び方	(ももやま子ども食堂) 遊び方はテレビゲームやデジタルゲームを中心として いる。読書やトランプゲームけん玉、おもちゃの種 類も豊富。近くの公園も利用可能。 (ていーだ子ども食堂) 遊び方は体育館を利用してバスケットやドッチボール、 大縄跳びをしていた。ミニ卓球台が卓球を行った。 塗り絵や絵本の読み聞かせ、ビデオ鑑賞を行ってい た。
食事の提供方法	(ももやま子ども食堂) 地域の人、地域にある料理屋のシェフ、ももやまの職 員など。 (ていーだ子ども食堂) 地域のお母さん方、ボランティアの大学生。

学習面 (ももやま子ども食堂) 受験に向けての相談。塾への送迎。
(ていーだ子ども食堂) 検定対策。地域の塾講師をよんで無料塾。

子どもとの関わり方

(ももやま子ども食堂) 子どもたちへの声掛けの工夫

- ①否定しない
- ②禁止しない
- ③命令しない

また、命にかかわること、周りに迷惑をかけること以外、注意しない。

指導、教育をする場ではないため、挨拶は強要しない。

家庭には関与せず、意識的に子どもだけにこだわる。

子どもが求めてきたら、それに応じる。身近にいて、信頼でき友達のような関係。大学生ボランティアなどが多く、大人と関わる機会も多い。

学校のこと、恋愛のこと、受験のことなど、なんでも相談に乗る。また、受験や自宅に帰る際は送迎を行う。

親が入院した際には、自宅訪問をすることもある。

必要な子には、施設でお風呂に入れることもある。

(ていーだ子ども食堂) 児童センターの決まりやルールがあるため、規律がある、学校・アットホームな雰囲気。

【ルール】

- ①掃除を一緒にする
- ②体育館利用・食事を取るときの順番を守る
- ③大人に対しての礼儀を重んじる
- ④館内に入るとき・ご飯取るときの氏名確認
- ⑤季節行事は子ども主体
- ⑥手伝いは自分から率先してやる

V. 考察、分析

【ももやま子ども食堂】

曜日ごとに利用できる子どもたちの学年を決めているが平日は毎日食事・居場所の提供している。学習面は、子ども自身の判断によるためサポートの質が異なる。入浴や送迎など食事以外の生活面のサポートもしている。

【ていーだ子ども食堂】

活動日が、第2・4土曜日のお昼だけなので利用できる子どもが限られている。

学習面は、無料塾や英検対策などサポートが手厚い。子どもの将来の進路のために活動している面もある。食事を保護者が作っているため保護者の居場所の確保もさ

れている。学習サポートによって、生活環境に課題を抱えていた子が高校に進学し進路の幅を広げることができた。問題行動があった子が地域との交流を通して夢を持って生活できるようになった。

VI. 今後の展望

2つの子ども食堂の良いところを合わせると子どもたちが通いやすい子ども食堂ができると考える。

【子どもが通いやすい子ども食堂の理想像】

保護者の仕事休みの多い日曜日以外は食事提供や居場所提供をして欲しい。

子ども達が誰でも通えるように人数制限や曜日制限をしない。

教育関係のサポートの充実。英検対策。受験のための対策。無料塾。

子どもだけではなく親の居場所も作る。

地域で地域の子どもの見守ることができる場所。

VII. 終わりに

両者の子ども食堂を訪問して、子ども食堂ごとに活動日や活動内容が異なっていることがわかった。食事面・学習面・生活面のサポート内容が子ども食堂ごとに特徴があり、独自のサポートスタイルがあった。貧困対策で設置された子ども食堂のサポートで進路の決定や生活面の向上で次世代の貧困を減らす手助けになっている。

VIII. 参考文献、調査協力

沖縄子どもの貧困白書

ももやま子ども食堂

ていーだ子ども食堂

IX. 指導教員コメント

ボランティアも行いながら、二つの子ども食堂について比較できるように詳しくまとめている点がよかった。今後の課題は、沖縄の子ども食堂の全体が把握できるような調査だと思います。継続的な研究を期待しています。